

死者への宣教（一ペト 3:19; 4:6）をめぐって*

辻 学

1. 問題設定

いわゆる「キリストの陰府下り」⁽¹⁾を一ペト 3:19 および 4:6 と関連づけるようになったのは、アレクサンドリアのクレメンス以降だと言われている⁽²⁾。

だが、死者の世界（それがどこであれ）におけるキリストの宣教を根拠づける箇所は、新約には見当たらず、ペトロの手紙一の2箇所もまたこの教理とは関係ないというのが、釈義家のほぼ共通認識になっていると言って良い⁽³⁾。

* 本稿は、日本聖書翻訳研究会第4回研究会(2023年8月30日)における発表に基づいている。

(1) Koch, *TRE* 15, 455-456. キリストの陰府下りを語る最初期の文献としては、ヘルマスの牧者「警」9.16.5; イグナティオス・マグネシア 8:2; 9:2; ペトロ福音書 41; ユスティノス『対話』72.4 が挙げられる。「陰府下り」が語るキリストの行為は、(1) 冥界における宣教、(2) 旧約の義人への授洗、(3) 冥界とその支配者の征服、である (Koch, op.cit., 455)。

(2) アレクサンドリアのクレメンス『ストロマティス（綴織）』VI 44.5; 45.4。クレメンスは一ペトを名指ししているわけではないが、当該箇所を参照していることは、εὐαγγελίζομαι という動詞（一ペト 4:6）が用いられていることから疑いない。またユスティノス（『ユダヤ人トリュフォンとの対話』72.4）は、エレミヤ書からの言葉として陰府下りと宣教に言及している。当該の文言はエレミヤ書になく、「エレミヤ書」という記述が正しければ、キリスト教徒による加筆と考えられるが、ここでも εὐαγγελίζομαι が用いられていることから、一ペトとの何らかの関係が想定できる。さらにオリゲネス『諸原理について』II 5.3 も参照。他方エイレナイオスは、キリストの陰府下りに言及している文脈で、一ペトにまったく触れていない（『異端反駁』V 31.1）。

(3) Koch, *TRE* 15, 455. Klumbies, “Verkündigung,” 209-210 に F. Spitta (1890) 以来の主たる批判者が挙げられている。最近でも、Jobes, 243; Keener, 271-272; Müller, 311 などは、「陰府下り」と一ペトとの関連に否定的。Reese, 212-219 は諸説を丁寧に検討し、問題点を挙げているが、自説を明示していない。興味深いことに、田川訳註は、「ここは、キリストが死と復活の間の期間に冥府下りをした、という神話を前提している」と述べている（6巻312頁）。

それでは、この2箇所はどう理解すべきだろうか。そしてその理解をどのように翻訳として表すのが適切だろうか。翻訳は釈義の結果としてなされるものであるゆえ、邦語諸訳の比較も交えつつ、この釈義的問題を整理しておきたい。

II. 「霊たちへの告知」(一ペト 3:19-20)

3:19 を諸訳は以下のように訳している。

新共同訳「そして、霊においてキリストは、捕らわれていた霊たちのところへ行って宣教されました。」

口語訳「こうして、彼は獄に捕われている霊どものところの下って行き、宣べ伝えることをされた。」

新改訳 2017「その霊においてキリストは、捕らわれている霊たちのところに行つて*宣言されました。」*別訳「宣べ伝えられました」

聖書協会共同訳「^e こうしてキリストは、捕らわれの霊たちのところへ行って宣教されました。c 別訳「その霊において」(パイロット版「そして、霊においてキリストは、捕らわれている霊たちのところへ行って宣教されました」。注はなし)

フランシスコ会訳「また霊においてキリストは囚われの霊たちの所へ行き、宣言されました。」

岩波訳「その際、牢にいる霊たちのところにも、〔キリストは〕行って宣べ伝えたのであった。」

田川訳「その際、囚われにある霊どものところにも赴いて、告知するため⁽⁴⁾である。」

原文 ἐν ᾧ καὶ τοῖς ἐν φυλακῇ πνεύμασιν πορευθεὶς ἐκήρυξεν を一応「直訳」しているのは田川訳だが、一ペトの著者が非常に言葉を省略した語り方 (Abbreviatur) をするせいで、その意味するところは不明瞭であり⁽⁵⁾、解釈の

(4)「告知する」(κηρύσσω) は直説法アオリストなので (ἐκήρυξεν)、「告知した」と訳すべきで、田川は誤訳している。おそらく前節の「あなたがたを神のもとへと導くため」(προσαγάγει) との対比という (それ自体は正しい=後述) 理解に起因する誤訳であろう。他の諸訳は正しく訳している。一方、原文の καὶ を訳出しているのは (「霊どものところにも」) 田川訳だけである。この καὶ は、解釈上重要なので訳出すべき (後述参照)。

(5) Klumbies, “Verkündigung,” 207.

分かれるポイントがいくつかある⁽⁶⁾。

1. 冒頭の ἐν ᾧ はどう理解すべきか。
2. 「霊たち」(πνεύματα) とは誰なのか。
3. その霊たちが「囚われ(φυλακή)の中にある」とはどういう意味か。
4. キリストが霊たちのところへ「行った」(πορευθείς) のはいつか。
5. 「宣教した」(ἐκήρυξεν: あるいは「告げ知らせた」) 内容は何か。

以下では、主題上連関のある 2 と 3 を一括して扱い、さらに 4 と 5 もまとめて論じることにする。

1. ἐν ᾧ の意味

ἐν ᾧ という前置詞句は、一ペトの中で繰り返し用いられているが、いずれも意味が定め難い (1:6; 2:12; 3:16; 4:4)。この関係代名詞を特定の名詞ではなく、先行する内容（「肉については死なされたが、霊については生かされ、あなたがたを神へと導く」）全体を指し示していると考え、この前置詞句を時間的な接続詞的表現と見なす解釈には一定の支持があり⁽⁷⁾、岩波訳や田川訳の「その際」はその立場を明瞭に示している。また、時間的ではなく因果関係を示す表現と考える立場もあり⁽⁸⁾、口語訳や聖書協会共同訳本文の「こうして」はおそらくその理解を反映しているものと思われる（Zürcher Bibel の“so”も同じ理解）。

だが、3:19 が一ペトにおける他の 4 箇所と違うのは、関係代名詞の指す先行詞が明確に存在するという点である。他の 4 箇所の場合は、先行詞となる男性ないし中性名詞が直前にないため、先行する節の内容を指すと解することになるが、3:19 の場合、18 節に πνεῦμα がある。したがってこの ἐν ᾧ は、Jordan Atkinson が言うように、この πνεῦμα を先行詞とする関係代名詞が

(6) Friedrich, *ThWNT* III, 706 を踏まえているが、上記第 1 点は独自に加えた。また Friedrich が挙げる第 4 点（誰が「宣教者」なのか）は省略した。次の第 5 点（上記第 4 点）と密接に関連しているからである。

(7) Selwyn, 197; Davids, 138; Elliott, 652; Jobes, 242-243 ほか多数。最近では Pierce, *Spirits*, 219-220; ブロックス、230 頁や吉田「死者への福音」、109 頁注 18 もこの立場。Blass-Debrunner, §383,1 参照。

(8) Spicq, 136; Goppelt, 255-256。ここに“darum”という語を入れている Müller, 307 もおそらくこの立場。

関係の与格 (dative of respect) に置かれていると見るのが適切である⁽⁹⁾。新共同訳、新改訳 2017、聖書協会共同訳別訳ならびにパイロット版、フランシスコ会訳の「(その) 霊において」はこの理解を反映している。RSV、NRSR、Lutherbibel、さらに Vulgata も同じ解釈に立っている。

2. 「囚われの中にある霊たち」

死者への福音宣教という理解を否定する解釈者たちの論拠は、「霊たち」(πνεύματα) が新約において人間の死者を指す例はほとんどなく⁽¹⁰⁾、むしろ超自然的存在を指す場合の方が多い(例、ヘブ 1:15 「(天使たちは) みな仕える霊」、黙 1:4 「彼の玉座の前にいる七つの霊」) ということにある。

この箇所については、創 6:1-6 に基づいたユダヤ教伝承が背景として指摘されている。この伝承は、エチオピア語エノク 6-16 章に見ることができる。

10:1 その後、大いなる、聖なる至高者は語りかけ、アルスヤラルユルをラメクの子(ノア)のところにつかわすに先立って、こう言われた。2「わたしの名によって彼に、『身を隠せ』と言え。また、来たるべき終末を彼に明示せよ。全地は滅亡するのだ。大洪水が起こって全地に及び、地上にあるものは滅び失せるのだ。3 いま、彼が難をのがれ、彼の子孫が世々代々生き残れるように彼に指示せよ。4 主はまた彼ラファエルに言われた。「アザゼルの手足を縛って暗闇に放りこめ。タドエルにある荒野に穴を掘ってそこにあいつを投げこめ。5 奴の上にごつごつした、鋭い石をいくつもせ、闇で奴を覆い、そこに永久に坐らせておけ。また奴の顔に何かかぶせて光が見えないようにせよ。6 審判の大いなる日に、彼は炎の中に放りこまれるのだ。〔中略〕11 神はミカエルに言われた。「シェミハザとその同輩で女たちとぐるになり、ありとあらゆるけがらわしいことをして自堕落な生活をした者たちにふれよ。12 彼らの子孫が斬りむすんで果て、愛児の滅亡を見たら、彼らを七〇世代、彼らの審判と終末の日、永遠の審判が終了するまで、大地の丘の下につないでおけ。13 その日彼らは拷問の火の下をくぐらされ、永久に獄舎に閉じこめられるであろう。14 そのときそれは燃えつき、滅び、いまからはじまってすべての世代の終わりまで彼らとともにつながれたままになるだろう。15 すべて快樂の(とりこになっている) 魂と、寝ずの番人の子孫を滅ぼせ。彼らは人間に乱暴を働いたから。

(エチオピア語エノク書 10:1-15、村岡崇光訳、『聖書外典偽典』4 収録)

(9) Atkinson, "Semantics," 126-129.

(10) 例外はヘブ 12:23。ここでは、「義人たちの」という修飾語があるからそうとわかる。

「囚われの中にある」という、文脈上必要と思われない修飾句から見ても、一ペトの著者がこのユダヤ教伝承を踏まえていることは間違いのないようだが⁽¹¹⁾（ただし、エノク書を知っていたとは限らない）⁽¹²⁾、その際、「霊たち」を悪しき天使的存在と考えるべきかどうかで解釈者の意見は分かれる⁽¹³⁾。

「霊」（πνεῦμα）が人間を指すケースは、確かに新約では稀だが、それでもヘブ 12:23 は無視できないし、ルカ 24:37, 39（「[イエスの] 霊を見ている」）、またダニ 3:86 LXX（「義人の霊と魂よ、主を賛美せよ」）、エチオピア語エノク 22:3-13⁽¹⁴⁾といった箇所からは、死んだ人間の「霊」という表現が決して不自然ではないことが見て取れる。続く 20 節では、この霊たちがノアの時代に神に服従しなかったとされ、ノア（とその家族）と対比されていることからしても、この「霊たち」はその時代の（神に従わなかった結果、洪水で死んだ）人間を指しているとするのが一番自然であろう⁽¹⁵⁾。

そのように解釈した場合、この霊たちが「囚われの中にある」とはどういう意味かが問われるが、これは、著者が伝承の「囚われた霊」（＝天使的存在）をノアの時代の人間と解釈した結果と考えることができる。その結果、

(11) エチオピア語エノク 10:13 参照。ただし「獄舎」と訳されている語は、ギリシア語訳では φυλακή ではなく δεσμοπτήριον。天使たちの投獄というモチーフは、ヨベル 5:6; シリア語バルク黙示録 56:13 にも見られる。さらにダマスコ文書 2:18 も参照。

(12) したがって、エチオピア語エノク書の当該箇所における叙述と一ペトとのそれとの間に相違点があること自体は、このユダヤ教伝承の知識を否定する根拠にはならない（吉田「死者への福音」、110 頁注 26 に対して）。

(13) 古くは Spitta, *Predigt*, 22ff.; Bousset, “Hadesfahrt,” 50ff.; さらに Kelly, 154; Achtemeier, 256; Keener, 273-274 など、天使的存在と解する。拙稿「ペトロの手紙一」693 頁も同じ。Reese, 217 はこれが現代の注解者によって最も広く支持されている見解だと言う。逆に Heckel, 116-117 や Schweizer, 74-75; Schelkle, 105; シュナイダー、186 頁などは人間を指すと見る。両方を含むと考えるのは、Selwyn, 199; Seethaler, 48. Vahrenhorst 156 は、決定を回避している。

(14) 村岡崇光氏が「靈魂、死者の魂」としている 22:3 は、ギリシア語訳では τὰ πνεύματα τῶν ψυχῶν τῶν νεκρῶν であり、「死者の靈魂」(22:9) も τὰ πνεύματα τῶν νεκρῶν、「この魂は兄のカインに殺害されたアベルから出ているものです」(22:7) の「魂」もギリシア語訳では πνεῦμα である (Black [ed.], *Apocalypse*, ad loc.)。

(15) 神の忍耐については、ラビ文献にも言及がある。「ピルケ・アボス」5:2a 「アダムからノアまでの十世代は彼の忍耐がいかに強いものであるかを示すためのものである。洪水を彼らの上にもたらすまでこの世代は絶えず彼を憤らせ続けてきたのであるから」(石川耕一郎訳『聖書外典偽典』3)。

伝承においては天使的存在に与えられた罰としての投獄が、神に従おうとしなかった人間への罰とされた。著者は明示していないが、神に対して不従順な者は、死者の世界で投獄されているというイメージなのであろう。

3. 「宣教」か「告知」か

「霊たち」が、ノアと同時代の人間たちのそれだとしたら、κηρύσσω の訳としては、「(福音の) 宣教」が適切ということになろう⁽¹⁶⁾。「霊」を天使的存在と見る解釈者たちは(注13参照)、「(何らかの) 告知」という理解に立っているが(新改訳2017やフランシスコ会訳、田川訳はこの理解を反映している)、この解釈にとって不利なのは、告知の内容が示されていないということである。キリストが天使たちに勝利したことの告知という説明は、確かに3:22と対応してはいるが(しかし22節の「天使」は悪しき天使だけでないはず)、テキストに書かれていないことを想像しているに過ぎないし、悪の勢力に対する勝利がこの文脈で問題になっているわけでもない(主題となっているのは、義のために苦しむこと。14, 17節参照)⁽¹⁷⁾。

「宣教した」という訳は、前後関係からも支持される。ここで注目すべきは、「囚われの中にある霊たちのところへも行き」という表現である。岩波訳と田川訳以外の邦訳聖書は、この「もまた」(καί)を訳出していないが、この表現は、「あなたがたを神へと導く」(18節)とのつながりを示しているゆえに極めて重要である。つまりキリストが罪をめぐって⁽¹⁸⁾苦しんだ(=受難した)のは、神に従うあなたがたを神へと導くためであり、「また」、ノアの時に神に従わず死んで、囚われの状態にある霊たちに宣教もしたというのである(Vulgataをはじめ、主な英訳、ドイツ語訳聖書も揃ってこの語を訳出している)。

(16) この訳語を不適当と見なした拙稿「ペトロの手紙一」693頁を訂正する。

(17) したがって、「この世の悪の軍勢に対するキリストの勝利の宣言を述べたものであろう」という、フランシスコ会訳分冊脚注(63頁注8)の解説は正しくない。

(18) 18節の「罪をめぐって」(περί ἁμαρτιῶν)という曖昧な表現は、ロマ8:3(「罪をめぐっては、肉において罪を断罪した」)に影響されたものか。「私たちの罪のゆえに」という意味合いに読み替える写本が多いことから、この表現が「罪のために」(新共同訳)や「罪のゆえに」(聖書協会共同訳)という意味には読めなかったとわかる(したがって、異読を採用したのでなければ、新共同訳や聖書協会共同訳の訳は不適切)。

そうだとすると、キリストが死者の世界にいる霊たちのところへ「行った」のはいつのことだろうか⁽¹⁹⁾。「肉については死なされたが、霊については生かされ」た（18 節）キリストが「霊において」（19 節）行ったのだから、死後の話であることは間違いない。「霊に関しては生かされ」が復活を指すのであれば、復活の後にキリストはその死者たちのもとへと向かったということになろう。復活のキリスト自らが、ノアの時代（つまりはイエス・キリストの出現以前）に神に従わなかった者たちの霊に対して福音を宣教したというのである。そうであれば、ここで語られているのは、死んで陰府に降ったイエスが復活以前に陰府で宣教したという「陰府下り」とはいささか異なった状況と考えられる。

III. 死者への福音宣教（一ペト 4:6）

新共同訳「死んだ者にも福音が告げ知らされたのは、彼らが、人間の見方からすれば、肉において裁かれて死んだようでも、神との関係で、霊において生きようになるためなのです。」

口語訳「死人にさえ福音が宣べ伝えられたのは、彼らは肉においては人間としてさばきを受けるが、霊においては神に従って生きようになるためである。」

新改訳 2017「このさばきがあるために、死んだ人々にも * 生前、福音が宣べ伝えられていたのです。 ** 彼らが肉においては人間としてさばきを受けても、霊においては神によって生きるためでした。】*「生前」は補足 ** 別訳「人間の目には肉においてさばきを受けたように見えても、神の目には霊において生きるためです」

聖書協会共同訳「死んだ者にも福音が告げ知らされたのは、彼らが、肉においては人として裁かれても、霊においては^b神のように生きるためです。」

^b 別訳「神に従って」（パイロット版「死んだ者にも福音が告げ知らされたのは、彼らが、人からすれば、肉において裁かれても、神からすれば、霊において生きるためです。」注はなし）

(19) 3:19 で言われているのは、単に「行く」（πορεύομαι）であって、「下る」ではない。「下って行き」（口語訳）は、「陰府下り」の教説を読み込んだと見られる。ただしこれは、訳としては単に「行った」とすべきだということであって、キリストが実際に「下って行った」とイメージされているかどうかとは別問題である。実際著者は、明らかに天に「昇って行く」イメージであるはずの 22 節でも単に「天に行った」（πορευθεὶς εἰς οὐρανόν）と表現している。

フランシスコ会訳「今、死んでいる者たちにも、かつてキリストの福音が宣べ伝えられたのは、彼らが、人の目には、肉において裁きを受けたように見えても、神の目には、霊において生きるためです。」

岩波訳「このためにこそ、つまり彼らが人間の目でみれば肉〔体〕としてさばかれても、神の目からみれば霊として生きることができるようにと、死者たちにも福音が告げられたのである。」

田川訳「すなわちこのことのために、死者に対しても福音が伝えられたのだ。人間的には彼らは肉に関して裁かれるが、神的には霊に関して生きるのである。」

ここでも、原文 εἰς τοῦτο καὶ νεκροῖς εὐηγγελίσθη, ἵνα κριθῶσιν μὲν κατὰ ἀνθρώπους σαρκί, ζῶσιν δὲ κατὰ θεὸν πνεύματι の直訳に一番近いのは田川訳である。この岩波訳と田川訳以外はすべて、導入部の εἰς τοῦτο γάρ を省略してしまっているが（岩波訳の「このためにこそ」は強調しすぎだが、γάρ の訳か）、これだと、6 節が 5 節の「彼ら〔異教徒〕は、生きた者たちと死んだ者たちとを裁こうとしておられる方に対して釈明することになるのである」を受けていることがわかりにくくなってしまう。

この箇所も、上述した 3:19 と同じく、著者がひどく言葉を節約した言い方をしているせいで、言わんとしているところがはっきりしない。一見しただけでも、次のような疑問点が湧く。

1. 福音が告げ知らされた「死者」（複数）とは誰か。
2. ἵνα 節は何を述べているのか。とりわけ、死者に「福音宣教がなされた」（εὐηγγελίσθη）のは誰によってか、また「人間たちによれば肉において裁かれたが、神によれば霊において生きる」とはどういう意味かがはっきりしない。

この 2 点について、以下に考察を試みたい。

1. 「死者たち」とは誰か

フランシスコ会訳は 6 節の訳文全体に対する注をつけており、次のように説明している。

「「死んでいる者たち」は、使徒あるいは福音宣教者からキリストの福音を聞いて、

これを信じ、洗礼を受けたが、キリスト来臨の前に死んでしまった人たちのこと。彼らは、「人の目には」すなわち、「肉」におけるこの世しか知らない無信仰の人たちの目には、「裁きを受けたように」すなわち、この世から消え去ったように見える。しかし、「神の目には」は(マ)、「霊において」生きているのである。⁽²⁰⁾

この説明は、原文がかなり言葉を補って解釈しないと理解できないものであることを示すと同時に、どこが解釈上の問題点なのかを明らかにしてくれている。

「死者たち」(複数)とは誰を指しているのだろうか。「罪の内に霊的に死んでいる者」という、古代の教父に好まれた解釈は、今日ではほぼ否定されている⁽²¹⁾。したがって、可能性としては、「すでに死んでいる者」(キリスト教以前の時代に生きていた全ての死者)か、生前に福音を聞いてキリスト者となり、「その後死んだ者」のいずれかということになる⁽²²⁾。上掲のフランシスコ会訳記注や新改訳 2017(「生前」という補足、「宣べ伝えられていた」という訳し方)は、「その後死んだ者」説⁽²³⁾を支持している。

「その後死んだ者」説を採る解釈者は、一ペトの叙述の背後に、一テサ 4:13 以下と同様の事情が存在すると考える。終末が来る前に亡くなる教会員はどうなるのかということが一ペトの時代の教会でも問題となっており、そのことに著者は答えようとしたというのである⁽²⁴⁾。

(20) これは、分冊の脚注(67 頁注 4)を短縮したもの。誤植(「は」の重複)は短縮作業の際に生じたものであろう。なお分冊と合本では訳文にわずかな違いがあるが(漢字の使い方など)、問題になるほどの変更はない。

(21) アレクサンドリアのクレメンスやアレクサンドリアのキュリロス、アウグスティヌスなど(Gschwind, *Niederfahrt*, 24; Schelkle, 117 による)。Gschwind, *ibid.*, 39 も、5 節の「生者」を義人、「死者」を罪人と解することから、この立場をとる。しかし、この理由づけ自体にすでに無理がある。Schelkle, 117 によればこの解釈は、死後に福音を受容するか拒絶するかを決断するという可能性を考えなくて良いという教理的理由(後述参照)から好まれたという。

(22) 前者を支持するのは Reicke, *Spirits*, 202-210; Goppelt, 276; Best, 155-157; Beare, 182; Achtemeier, 290; Elliott, 733-734; Jobes, 272; など(Williams/Horrell, II 339 n. 169 参照)。後者を主張するのは Selwyn, 337-339; Dalton, *Proclamation*, 57; Schweizer, 80; Kelly, 174; ブロックス, 268-269 頁など(Williams/Horrell, II 344 n. 189 参照)。

(23) 「すでに死んでいる者」説と「その後死んだ者」説という名称は、Horrell, “The Dead,” 71-72(および Williams/Horrell, II 338-339)の“‘already dead’ view”と“‘since died’ view”に倣った。

(24) E.g. Achtemeier, 290.

しかし、パウロの初期の手紙であるテサロニケの信徒への手紙一に反映しているのと同じ事情が、1世紀末頃に書かれたペトロの手紙一⁽²⁵⁾の背後にあるとは考えづらいし、この手紙には、終末の接近といった事情の反映も見られない⁽²⁶⁾。何よりも、「その後死んだ者」説の場合、5節の「死者」よりも意味の幅を狭くとらないといけなくなるが（キリスト者のみが対象）、5節を補う従属節である6節において、何の補足的説明もなしにそのような意味のずれを読み取るのは難しい⁽²⁷⁾。

他方、「すでに死んでいる者」説に立つ場合、「福音宣教がなされた」（εὐηγγελίσθη）の意味が問題となる。「その後死んだ者」説の場合と同じように、宣教者たちによってなされたと考えることも不可能ではないが（すでに亡くなったキリスト者によって福音が告げられる——ヘルマス「譬」9.16.5「あの使徒たちや教師たちが、神の子の名を宣教し、神の子の力と信仰にあって眠りについたのちに、すでに永眠していた人々にも宣教して [ἐκήρυξαν]、自ら彼らに宣教の封印を与えた」[荒井献訳]）、3:19では（相手が誰であれ）イエスが宣教の主体となっている。またペトロ福音書 10:40-42では、イエスの墓から出てきた3人（1人はイエス）に十字架が後ろから従い、「お前は眠っている者たちに宣べ伝えたか」（ἐκήρυξας τοῖς κοιμωμένοις;）と言う天からの声に十字架から「はい」という応答がなされるという場面が描かれている（41節）。ここにも、イエスによる死者たちへの宣教という表象を見て取ることができる。したがって、イエス自身によりキリスト教の福音が死者に宣教されるという意味で我々の箇所を理解することも十分可能であろう。

教理的により大きな問題となるのは、死後の回心は可能なのかということである。新約聖書には、この問題に直接言及した箇所はないが⁽²⁸⁾、ヨハ 5:25-29は極めて重要な意味を持つ。

(25) Achtemeier, 49-50（後80～100年）や Elliott, 138（後73～92年）はそう考えている。

(26) 4:7はペトロが書いたというフィクションの水準で理解されるべきで、著者が読者に与えている個々の訓戒は、終末の接近を前提にしたものではない。

(27) Schweizer, 80.

(28) 死後の悔い改めに対して否定的と見なせるのは、ルカ 16:26である。Dalton, *Proclamation*, 235はヘブライ 9:27を挙げるが、この箇所は（Horrell, “The Dead,” 85が言うとおり）明確な姿勢を取っていない。

²⁵ よくよく言うておく。死んだ者が神の子の声を聞き、聞いた者が生きる時が来る。今がその時である。²⁶ 父が、ご自身の内に命を持っておられるように、子にも自分の内に命を持つようにしてくださったからである。²⁷ また、父は裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子だからである。²⁸ このことで驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞く。²⁹ そして、善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出て来るであろう。（聖書協会共同訳）

D. G. Horrell によれば⁽²⁹⁾、25 節の「死んだ者」は精神的な意味であるが、「墓の中にいる」、「人の子の声を聞く」ことになる者たちというのは実際の死者に他ならず、また義人や信仰者にも限られない。この箇所は、一ペト 4:6 を「すでに死んでいる者」説にしたがって読む場合の重要な並行箇所と見なし得る⁽³⁰⁾。

2. ἵνα 節の意味

4:6 で議論の対象となるもう一つの点は、ἵνα 節の意味である。ここは、κριθῶσιν μὲν κατὰ ἄνθρώπους σαρκί と ζῶσιν δὲ κατὰ θεὸν πνεύματι とが、μὲν...δε... という構文からもわかるとおり、明確に対比されている。

これを、「肉においては人として裁かれても、霊においては神のように生きるため」（聖書協会共同訳）のように訳すと、「肉において裁かれる」ことが福音宣教の後に生じると解さざるを得ないので⁽³¹⁾、「その後死んだ者」説の方がうまく合うことになる。だが、裁かれる「ために」福音宣教がなされるとはどういう意味だろうか。

μὲν...δέ という構文は確かに対比を表すのだが、その際「前半部分の譲歩

(29) Horrell, “The Dead,” 86-87. Horrell は他に、一コリ 15:29 の「死者のための洗礼」および二マカ 12:43-45 「〔ユダは〕死者たちについて、罪の贖いがもたらされるようにした」（聖書協会共同訳）を、死後の回心という概念の並行例として挙げる。ただしこれらは、Horrell 自身も認めるように（86）、死者が福音宣教に応じるというのとはやや異なっている。

(30) 初期キリスト教における死後の悔い改めの可能性という問題については、Trumbower, *Rescue*, 33-47 を参照。

(31) 口語訳や岩波訳、田川訳も同じ。田川訳は、目的を表す ἵνα を訳出していないので、本動詞 εὐγγελίσθη とのつながりが不明瞭になってしまっている。

的な μέν によって、強調は δέ のある後半部分に置かれる」ので⁽³²⁾、この ἵνα 節の中心は後半の「神によれば霊について生きる」にある。つまり、μέν…部分は前置きの役割になっている。

見逃せないのは動詞の時制である。前半の κριθῶσιν はアオリストだが、後半の ζῶσιν は現在形になっている。つまり、「人間によれば裁かれたが、神によれば生きるため」ということになる。このように読めば、裁かれるために福音宣教がなされるという奇妙な理解を避けることができる⁽³³⁾。

前半部と後半部、すなわち κατὰ ἀνθρώπους σαρκί と κατὰ θεὸν πνεύματι は完全に対応しているが、翻訳が難しい。κατὰ ἀνθρώπους/θεόν は、「人間／神に従って事柄を見れば」ということであろう（新改訳別訳、聖書協会共同訳パイロット版、フランシスコ会訳、岩波訳）⁽³⁴⁾。聖書協会共同訳本文の「人として」「神のように」はかなり無理があると思う。「人として」は口語訳に従っているようだが、原文により忠実なパイロット版や新共同訳（「人間の見方からすれば」）の訳を捨てて、あえて口語訳に近づけた理由はわからない⁽³⁵⁾。「神のように」はさらに理解に苦しむ（人が「神のように生きる」とはどういう意味なのだろうか？）。別訳「神に従って」の方が良い。「別訳」を掲げる基準がよくわからないが、この場合は「別訳」の方が直訳なのだから、本文と注をせめて逆にすべきだったのではないだろうか。何より、「人として」・「神のように」では、κατὰ ἀνθρώπους と κατὰ θεόν が対応関係にあるということがまるで見て取れない。ここは、パイロット版の訳を維持すべきであった。

「人間」は複数形なので、単に人間と神を概念として対比しているというよりも（したがって「人として」という訳はあり得ない）、人々の判断によればという意味であろう。人々が見るところと神が見るところは異なると著者は言っているのである。

(32) Blass-Debrunner, §447₁₁ (“zwar – aber”).

(33) Williams/Horrell, II 351 に賛成。

(34) 田川訳「人間的には」もおそらくこの理解。

(35) 口語訳「人間としてさばきを受ける」や聖書協会共同訳本文の「人として裁かれる」は、κριθῶσιν κατὰ ἀνθρώπους の訳としては困難である。口語訳は RSV の “judged in the flesh like men” に影響されたか。人間の普遍的な特徴を強調しており、「人間の仕方によれば」(according to the manner of humans) と理解するのが良いと言う Williams/Horrell, II 355 n. 234 にも賛成できない。

σάρκι/πνεύματι をどう解するかも難しい。「(神の) 霊によって」という具格的理解は、「肉」との対比がうまく説明できない⁽³⁶⁾。「肉に関して、霊に関して」(田川訳)は、これを関連の与格ととるものだが、意味するところが明瞭でない。結局のところ、この与格は領域を表すものと解する他にないように思われる(諸訳が採用している「において」)。すなわち、肉の領域においては裁きを受けたけれども、霊の領域においては生きることになる、というのである⁽³⁷⁾。

この表現は、3:18を受けている。すなわちキリストが「肉においては死なされたが、霊においては生かされ」たのと同じように、死者も「肉においては裁かれたとしても、霊においては生きる」。キリストが「肉において死なされた⁽³⁸⁾」とは、同じ節の「罪をめぐって〔あるいは「罪のゆえに」〕苦しんだ⁽³⁹⁾」を言い換えていることからして、受難の死を意味しているに違いない(マタ 26:59; 27:1; ロマ 7:14; 8:13 参照)。そうであれば、「生かされた」は復活を指しているはずである(ロマ 4:17; 8:11; 一コリ 15:22, 36 参照)。

それゆえ、「肉において裁かれる」を、3:18 との並行性に基づいて迫害や殉教の死と結びつける解釈もあるが、これは、「その後死んだ者」説にはうまく適合するものの、「すでに死んでいる者」説とは相容れない。また、そうであれば、3:18 と同じく「死なされた」と表現すれば良かったはずである。

となるとここは、Williams/Horrell などが言うように、死の経験そのもの

(36) グルーデム、192 頁「聖霊の活動によって特徴づけられた目に見えない「霊的な」永遠の領域で生き、祝福を楽しんでいること」は、この理解にやや近い。具格的与格については、Blass-Debrunner, §195 参照。

(37) 岩波訳の「肉として」「霊として」も、おそらくこの意味であろうか。Williams/Horrell, II 352 もこの立場。英訳の“in the flesh/ in the spirit” (RSV, NRSV. ただし REB の“in the body”は良くない)、ドイツ語訳の“im Fleish/ im Geist”も同様の理解に立っていると思われる。

(38) 「死なされた」は、ἀποκτείνω (殺す=マタ 16:21; 17:23; 一テサ 2:15 ほか多数)ではなく θανατόω (死なせる)の受動態なので、日本語としては不自然だがこのように訳した。続く「生かされ」は ζωοποιέω の受動態。

(39) 聖書協会共同訳が注で挙げている異読「死んだ」(ἀπέθανεν)にも有力な写本の支持があるが、「死んだ」を採る写本の大多数は、「罪をめぐって私たち(または「あなたがた」)のために死んだ」と読んでいる。これを「罪をめぐって苦しんだ」に書き換えることは(2:21に「あなたがたのために苦しんだ」があるとはいえ)、「より難しい読み」の原則から考えて蓋然性が低い。したがって、「苦しんだ」(ἐπαθεν)がより古い読みと考えられる。

を神の裁きと捉えていると理解するのが適切なようである。パウロ書簡にも、病気になることや死ぬことを神の裁きと見なしている箇所がある——「主の体をわきまえないで食べて飲む者は、自分に対する裁きを食べて飲むことになるのです。あなたがたの間に、弱い者や病人が大勢おり、また死んだ者も少なくないのは、そのためです。もし私たちが、自分をわきまえていれば、裁かれることはなかったでしょう」(一コリ 10:30-32、聖書協会共同訳)⁽⁴⁰⁾。一ペトの著者がこの箇所を踏まえて「裁かれる」と言っているかどうかは明らかでないが、「生きる」との対比からして、「死ぬこと」、おそらくは何らかの不幸な死に方(病死など)を指して、それは人間の目から見れば神に裁かれたかのようであるが、と著者は述べていると考えられる。

たとえ、肉の領域では死という裁きを受けたように人々からは見えたとしても⁽⁴¹⁾、しかし死後に福音宣教がなされることで、神から見れば、霊の領域で死者たちは生きるようになる。それは、生きている者と死んでいる者に対する真の裁き(4:5)を乗り越えて、神のもとへと至る(3:18)ことを指しているとして良いであろう。

そうであれば、3:19と4:6とは相互に無関係なのではなく⁽⁴²⁾、死者への宣教という同一の事態を、前者ではキリストの死と復活に焦点を当てて、そして後者では終末における生者と死者への普遍的裁きという視点から論じていることになる。

IV. まとめ

一ペト 3:19と4:6はいずれも、キリストによる死者への宣教という表象を、それぞれ別の文脈に置いて提示している。3:19においては、「神の御旨が望み給うのであれば、悪を行う者たちよりも善を行う者たちが苦しむ方が良い」

(40) Williams/Horrell, II 355, 同頁注 232 もこの箇所をパウロ書簡における並行例として挙げている。さらに類似の例として、知 3:24 も参照——「彼らは愚か者たちの目には死んでいるように映り、この世からの彼らの旅立ちは災いに／我々からの離別は破滅に見えた。しかし彼らは平安の内にいる。人間の目には懲らしめを受けたように見えても／彼らには不死への満ち満ちた希望がある」(聖書協会共同訳)。

(41) それは、「裁かれて死んだ」(新共同訳)というのとは微妙に異なる。そもそも「死んだ」という、原文にない語を補っていること自体が良くない。

(42) Achtemeier, 290-291 に反対。

（私訳）という主張を、キリスト自身の経験と重ね合わせている（信者の苦しみをキリストの苦しみに重ね合わせるのが一ペトの特徴）。すなわちキリストの受難は、復活したキリスト自らが、ノアの時代（すなわちキリスト出現以前の時代）に神に不従順であったがゆえに死者の世界で（それがどこかは明示されていない）囚われていた霊たちに宣教をするためであったという（したがって、キリストが死後に陰府へ下って宣教したというのではない）。4:6 は死者への宣教を、終末における生者と死者への普遍的裁きという文脈で語る。たとえ肉の領域では死という裁きを受けたように人々からは見えたとしても、死者へも福音宣教がなされ、生ける者も死んだ者もすべて最後の審判に臨み、霊において生きる可能性へと開かれていると著者は言う⁽⁴³⁾。

このように理解した場合、聖書協会共同訳の訳文はどう評価できるだろうか。3:19 においては、「こうして」のところは別訳「その霊において」を採った方が良かったが、その他の点では問題がない。他方 4:6 は、「人として裁かれても」と「神のように生きる」が原意を活かしていない。この箇所については、パイロット版の翻訳を残しておく方が良かったと思う。

(43) 死後に福音宣教を聞いた者にも救済の可能性が開かれているということは、万人救済とは微妙に異なる。シュナイダー、196 頁が言うように、「そこに描かれている出来事においては、ただ救いの提示が述べられているだけだからである」。他方著者は、異教徒が有罪に定められることを必然と決めてかかっているようにも見えない。「もし義人が辛うじて救われるのなら、不敬虔な者や罪人はどこに出ることになるのだろうか」（4:18、私訳）といった表現には、著者がこの問題について決定的な言い方を避けていることが窺われる。Horrell, “The Dead,” 79-80 は、著者が 3:12 で詩 33:13-17LXX を引用するにあたって、詩 33:17b 「彼ら〔悪を行う者たち〕の記憶を地上から破棄するため」を削除している点を指摘する。

参考文献 *一ペトの注解書は著者名のみによって引用している。

Achtemeier, P. J., *1 Peter*, Hermeneia (Minneapolis, MN: Fortress, 1996).

Atkinson, J., “The Semantics of ἐν ᾧ in 1 Peter,” *BiTr* 72 (2021), 117-132.

Beare, F. W., *The First Epistle of Peter* (Oxford: Blackwell, ³1970).

Best, E., *1 Peter*, NCBC (Grand Rapids, MI: Eerdmans; London: Marshall, Morgan & Scott, 1971).

Black, M. (ed.), *Apocalypsis Henochi Graece. Fragmenta Pseudepigraphorum Quae Supersunt Graeca*, PVTG 3 (Leiden: Brill, 1970).

Blass, F./A. Debrunner, *Grammatik des neutestamentlichen Griechisch*. Bearbeitet von F. Rehkopf (Göttingen: V&R, ¹⁷1990).

Bousset, W., “Zur Hadesfahrt Christi,” *ZNW* 19 (1919/20), 50-66.

Dalton, W. J., *Christ's Proclamation to the Spirits: A Study of 1 Peter 3:18-4:6* (Rome: Pontificio Istituto Biblico, ²1989)

Denis, A.-M., *Concordance grecque des pseudépigraphes d'Ancien Testament* (Louvain-la-Neuve: Université Catholique de Louvain, Institut Orientaliste, 1987).

Elliott, J. H., *1 Peter*, AB 37B (New York et al.: Doubleday, 2000).

Friedrich, G., Art. κήρυξ κτλ., *ThWNT* III (1938), 683-717.

Goppelt, L. *Der erste Petrusbrief*, KEK XII/1 (Göttingen: V&R, ⁸⁼¹1978).

Gschwind, K., *Die Niederfahrt Christi in die Unterwelt*, NTA II 3/5 (Münster: Aschendorff, 1911).

Heckel, Th. K., *Die Briefe des Jakobus, Petrus, Johannes und Judas*, NTD 10 (Göttingen: V&R, 2019).

Horrell, D. G., “Who are ‘The Dead’ and When was the Gospel Preached to Them?: The Interpretation of 1 Pet 4.6,” *NTS* 48 (2003), 70-89.

Jobes, K. H., *1 Peter*, BECNT (Grand Rapids, MI: Baker Academic, 2005).

Keener, C. S., *1 Peter: A Commentary* (Grand Rapids, MI: Baker Academic, 2021).

Kelly, J. N. D., *The Epistles of Peter and of Jude*, BNTC (London: Adam & Charles Black, 1969).

Koch, E., Art. Höllenfahrt Christi, *TRE* 15 (1986), 455-461.

Klumbies, P.-G., “Die Verkündigung unter Geistern und Toten nach 1Petr 3,19f. und 4,6,” *ZNW* 92 (2001), 207-228.

- Mara, M. G., *Évangile de Pierre: Introduction, texte critique, traduction, commentaire et index*, SC 201 (Paris: Édition du Cerf, 2006).
- Müller, Chr. G., *Der Erste Petrusbrief*, EKK XXI (Ostfildern: Patmos; Göttingen: V&R, 2022).
- Pierce, C. T., *Spirits and the Proclamation of Christ. 1 Peter 3:18-22 in Light of Sin and Punishment Traditions in Early Jewish and Christian Literature*, WUNT II/305 (Tübingen: Mohr Siebeck, 2011).
- Reese, R. A., *1 Peter*, NCBiC (Cambridge: CUP, 2022).
- Reicke, B., *The Disobedient Spirits and Christian Baptism. A Study of 1 Peter III.19 and Its Context*, ASNU XIII (Copenhagen: Ejnar Munksgaard, 1946; repr. Eugene, OR: Wipf & Stock, 2005).
- Schelkle, K. H., *Die Petrusbriefe. Der Judasbrief*, HThK XIII/2 (Freiburg: Herder, 1988).
- Schweizer, E., *Der erste Petrusbrief*, ZBK.NT 15 (Zürich: TVZ, 1998).
- Seethaler, P.-A., *1. und 2. Petrusbrief/Judasbrief*, SKK.NT 16 (Stuttgart: Katholisches Bibelwerk, 1985).
- Selwyn, E. G., *The First Epistle of St. Peter* (London: MacMillan, 1958).
- Spicq, C., *Les Épîtres de Saint Pierre*, SB (Paris: Gabalda, 1966).
- Spitta, F., *Christi Predigt an die Geister (1 Petr. 3,19ff.): Ein Beitrag zur neutestamentlichen Theologie* (Göttingen: V&R, 1890).
- Trumbower, J. A., *Rescue for the Dead: The Posthumous Salvation of Non-Christians in Early Christianity* (Oxford: OUP, 2001).
- Vahrenhorst, M., *Der erste Brief des Petrus*, ThHK 19 (Stuttgart: Kohlhammer, 2016).
- Williams, T. B./D. G. Horrell, *A Critical and Exegetical Commentary on 1 Peter*, 2 vols., ICC (London et al.: T&T Clark, 2023).
- グルーデム、W. A. 『ペテロの手紙第1』、ティンデル聖書注解（いのちのことば社、2007年〔原著1988年〕）。
- 左近淑他訳『聖書外典偽典第三巻 旧約偽典I』（教文館、1985年）。
- シュナイダー、J. 『公同書簡』NTD（ATD・NTD 聖書註解刊行会、1975年〔原著¹⁰1968年〕）。

辻 学「ペトロの手紙一」、山内眞監修『新共同訳新約聖書略解』（日本キリスト教団出版局、⁴2017 年）、686-697 頁。

ブロックス、N.『ペテロの第一の手紙』EKK XXI（教文館、1995 年〔原著³1989 年〕）。

村岡崇光訳『聖書外典偽典第四巻 旧約偽典Ⅱ』（教文館、⁵1986 年）。

吉田新「死者への福音？——第一ペトロ書における〈福音〉理解」、佐藤司郎・吉田新編『福音とは何か——聖書の福音から福音主義へ』（教文館、2018 年）、93-114 頁。